台大日本語文研究第 25 期
2013 年 6 月、頁 25-44
2013-04-01 收稿、2013-05-13 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2013.25.27

有關如意寶珠旅程之考察
—《源氏物語》與《入唐求法巡禮行記》之比較—

陳斐寧*

摘要

《源氏物語》本文描寫中，男主角光源氏在須磨過了一段謫居生活後，因緣際會於明石一地邂逅了「明石君」，開啓了他新的人生旅程。在《源氏物語》明石篇裡，以善於彈琴「明石入道」的女兒身分出現的這位「明石君」，將會爲光源氏生下被視爲如意寶珠的明石姬君。本論文以如意寶珠爲出發點，探討《源氏物語》與《入唐求法巡禮行記》的敘述技巧與歷史考察，藉此對光源氏的人物造型有更豐富的解讀。

關鍵詞：源氏物語、入唐求法巡禮行記、光源氏、圓仁、如意寶珠

* 靜宜大學日本語文學系助理教授

The Travels for the Wish-fulfilling Jewel(CINTAMANI): To Compare the *Genji-Monogatari* With *Nittoguho-Junreikouki*

Chen, Fei-ning*

Abstract

In the famous Japanese court tale, Genji-Monogatari (The Tale of Genji), the hero Hikaru-genji had dark days travel in Suma. He eventually encountered a female who was skilled in KOTO, named AKSHI-NO-KIMI. Interestingly the female protagonist AKASHI-NO-KIMI are indicated what she was similar to the “CINTAMANI” a wish-fulfilling jewel. This article will show the importance of interactions between the dark days travel of Hikaru-genji and Ennin.

Keywords: *Genji-Monogatari*, *Nittoguho-Junreikouki*, Hikaru-genji, Ennin, CINTAMANI

* Fei-ning Chen, she is currently a Assistant Professor of the Department of Japanese Language and Literature, Providence University.

「如意宝珠」をめぐる旅
―『源氏物語』と『入唐求法巡礼行記』との比較を通して―

陳斐寧*

要旨

『源氏物語』明石巻における、光源氏と琴の一族である明石入道の娘との婚姻が、いわゆる「如意宝珠」としての明石の姫君を獲得することであることは、すでに指摘されている。本稿は、それをふまえたうえで「如意宝珠」をめぐる旅程と『入唐求法巡礼行記』をはじめとする諸言説との比較を通して、光源氏の造型に隠されたもう一つの意味を明らかにすることとする。

キーワード：源氏物語、入唐求法巡礼行記、光源氏、円仁、如意宝珠

* 静宜大学日本語学科助理教授

「如意宝珠」をめぐる旅
―『源氏物語』と『入唐求法巡礼行記』との比較を通して―

陳斐寧

一、はじめに

『源氏物語』須磨・明石巻といえば、光源氏二年五ヶ月余りの須磨流離を中心に、須磨への退去から明石の君との出会い、明石の浦を去るまで、といった辛苦の旅が描かれたものとして知られている。須磨・明石巻における光源氏をめぐる古来の注釈書としては、古くは菅原道真・在原行平・源高明・小野篁・藤原伊周[1]をはじめとして、周公旦、屈原[2]といった歴史上の「悲劇的人物」が準拠として、幾度なく取り上げられてきた。さらに近代においては、折口信夫によって貴種流離譚が提唱され[3]、「死と再生」の意味などが読み解かれることとなった[4]。このように、『源氏物語』須磨・明石巻は、中世の準拠論によりその歴史的先例が明らかになるとともに、さらに近代民俗学の視点によって読みが深められてきた。

しかしながら、これまでの準拠論が根拠とした「悲劇的人物」という先例と実際の物語の描写とを各時期の準拠や史実とを照らし合わせると、いずれも相違が浮き彫りになり、十分に読み解けない点が残る。例えば、これまで準拠例として挙げられてきた菅原道真・在原行平・源高明・小野篁・藤原伊周は、いずれも謫居先で亡くなるか、たとえ朝廷に戻ることが許されたとしても、高位高官に復帰することは皆無であった人物である。一方、光源氏といえば、須磨流離から帰京した後、右大将から権大納言、内大臣へととんとん拍

---

1 『岷江入楚』(『源氏物語古注釈叢刊　第七巻』、武蔵野書院)。
2 清水好子氏「須磨退去と周公東遷」(『源氏物語論』塙書房、昭和四十一年)、後藤祥子氏「帝都召還の論理」(『源氏物語の史的空間』東京大学出版会、昭和六十一年)。
3 折口信夫氏「小説戯曲文学における物語要素」(『折口信夫全集七　国文学編１』中央公論社、昭和三十年)。
4 高崎正秀氏『源氏物語論』(桜楓社、昭和四十六年)、林田孝和氏「須磨のあらし」(『源氏物語の発想』桜楓社、昭和五十五年)。

子で昇進していくのである。すなわち、須磨・明石巻における光源氏は、単に歴史上の「悲劇的人物」を踏まえて造形されただけではないのである。

さらに、民俗学の貴種流離譚の定型をふまえただけでは、須磨・明石巻における諸問題をすべて解決することができない。明石の物語に潜在する神話的話型はすでに多くの先行研究によって明らかにされている。例えば、古くは古注釈の『花鳥余情』から、『源氏物語』は『記紀』の龍宮訪問譚と構造を等しくしていると論じられている。具体的には「光源氏――彦火々出見、明石入道――龍王、明石君――豊玉姫、明石姫君――潮満つ玉潮干る玉（如意宝珠）のような対応となる[5]。「須磨・明石巻」が『記紀』神話伝承の要素を抱え込むことは確かであるが、だが、こうした「神話伝承」「話型論」を中心にする理解では、光源氏が須磨で暴風雨の遭遇の理由や海龍王と住吉神の御加護の理由をどう解釈するかという問題について十分に解明できないのである。

本稿では、この旅程の物語を、これまでとは違う視角、例えば「異界（異国）渡海」という要素を持つ円仁の遠行渡海から新しく捉え直すこととする。具体的には「海を渡る旅」を起点とし、円仁の『入唐求法巡礼行記』を取り上げ、「異界（異国）渡海」の諸素材との比較を通して、光源氏の造型をはじめとした「須磨・明石」の表象したものとは一体何であるのか、それを明らかにすることとする。

二、光源氏と円仁の「危機脱出譚」―その類似の構造

まず、都を離れる前に光源氏が賀茂参拝をする描写を見てみよう。須磨巻では「明日とての暮には、院（＝桐壺院）の御墓拝みたてまつりたまふとて、北山へ参うでたまふ。（中略）月待ちいでて出でた

[5] 「秘龍宮よりの事なり。花鳥説おもしろし。花これは彦火々出見尊を源氏君にたとへて龍神の豊玉姫をあはせてまつりしをあかしの入道の女になずらへかけること葉なり。箋聞、此夢に宮よりめしあるといふ源氏の心に龍宮の事と思ひて恐怖し給ふなり。是は都へのぼりたまふべき随相なり」（『岷江入楚』十二）。

まふ。御供にただ五六人ばかり、下人も睦ましきかぎりして、御馬にてぞおはする。（中略）賀茂の下の御社を、かれと見わたすほど、ふと思ひ出でられて、下りて御馬の口を取る。（中略）御社の方拝みたまふ。神に罷申したまふ」（②「須磨」一七〇～一七三頁）[6]という、光源氏が出立する直前に賀茂参拝と御陵参拝の様子が書き起こされている。

ここでは「神に罷申したまふ」、つまり神にお許しを請う描写に注目してみたい。この描写から、光源氏が賀茂神に祈願してから須磨へ船旅を出立することになったことがわかる。そこで、遠行に出る際「賀茂神」「御陵」と関わる史実があるかどうかを古記録に確かめるとすれば、『続日本後紀』によると、仁明朝における最後の遣唐使が渡唐する直前の承和三年（八三六）二月に遣唐使一行が賀茂大社に詣で供物を捧げた記録が見られる[7]。さらに同年五月二十二日にこの遣唐の旅のために、天智・光仁・桓武・神功皇后の御陵に幣帛を奉って祈ったことまでも確認できるのである[8]。興味深いことには、この仁明朝の遣唐使が渡海する前に「賀茂参拝」と「御陵参拝」を結んでいる風景は、光源氏の須磨出向の風景に色濃く影を落としており、ここから、『源氏物語』の語り手が、この二つの参拝をもとに光源氏の須磨下向の旅路を語り出そうとしていることに気付かされるのである。

重要となるのは、「海を渡る遠行」という問題意識の処理だが、この点に留意しながら、光源氏が須磨の旅に出立する以前から旅路に至る道程がどう描写されているかを見ることとする。光源氏の「海を渡る旅」は三月下旬に京を離れて船で須磨へ出発することから語りだされている。

---

6 『源氏物語』の引用は、阿部秋生氏・秋山虔氏・今井源衛氏校注、日本古典文学全集『源氏物語』（小学館）による。括弧内の算用数字は冊数、漢数字は頁数を示す。

7 『続日本後紀』承和三年（八三六）二月七日条「丙子、遣唐使奉幣賀茂大神社」。

8 『続日本後紀』承和三年（八三六）五月九日、二十二日条、「庚申、為遣唐使奉山階田原柏原神功皇后陵幣帛曰、云々」。

（前略）御舟に乗りたまひぬ。日長きころなれば、追風さへそひて、まだ申の刻ばかりに、かの浦に着きたまひぬ。かりそめの道にても、かかる旅をならひたまはぬ心地に、心細さもをかしさもめづらかなり。大江殿と言ひける所は、いたう荒れて、松ばかりぞしるしなる。（②「須磨」一七八頁）

細部については特定されていないものの、光源氏が須磨への道順は、伏見で舟に乗って淀川を下り、難波で一泊、その翌日難波からまた舟に乗り、須磨には午後四時頃に着いたと考えられている[9]。須磨までの旅の景色については後に詳述するとして、ここではまず、須磨到着からおよそ一年後の場面から見てみることにしたい。

A、弥生の朔日に出で来たる巳の日、（中略）海の面は、衾を張りたらむやうに光り満ちて、雷鳴りひらめく。落ちかかる心地して、からうじてたどりきて、（中略）さは海の中の龍王の、いといたうもののめでするものにて、見入れたるなりけりと思すに（②「須磨」二〇八～二一〇頁）

引用Aにあるように、須磨到着の翌年三月の朔日からはじまる暴風雨の中、故父帝が現れ、住吉の神の仰せに従って須磨を去るようにと告げられ、その翌朝、無事明石に着くという経過となる。

B、そのまたの日の暁より風いみじう吹き、潮高う満ちて、浪の音荒きこと、巌も山も残るまじきけしきなり。雷の鳴りひらめくさまさらに言はむ方なくて、（中略）いろいろの幣帛捧げさせたまひて、住吉の神、近き境を鎮め護りたまふ（②「明石」二一五～二一六頁）

C、また海の中の龍王、よろづの神たちに願を立てさせたまふに、いよいよ鳴りとどろきて、おはしますにつづきたる廊に落ちかかりぬ。（中略）いとらうがはしく、泣きとよむ声雷にもおとらず。（②「明石」二一七頁）

さらに、引用Bにあるように、『源氏物語』「須磨」巻末には、京

[9] 日向一雅氏『源氏物語の鑑賞と基礎知識　須磨』（至文堂、平成十三年十一月）九十三頁。

を離れて須磨生活が一年ほど経過した三月の朔日から雷が鳴ったり稲妻が異様に光ったりした暴風雨の描写が描かれる。雷はいまにも落ちかかってきそうな有様であり、これは海の龍王がまことにひどく物愛でをするもので、自分（＝光源氏）を見込んだのだろうという叙述がなされている。

その後、引用Cからわかるように、暴風雨はますます止まない状態となり、さらに夜明け方から風は激しく吹き立ち、浪の音の荒々しいことは、巌も山も残らず押し流されそうな勢いだとある。雷が鳴り、稲妻のきらめくさまは言いようもなく、住吉の神に多くの願を立て、また海の中の龍王やそのほか数多くの神様に願を立てたのだが、雷が一層鳴り轟き、廊に雷が落ちて、廊が焼けてしまった描写が見られる。

この三つの描写から、暴風雨の落雷の中で救いの神様の住吉神と、人間を海に飲み込む海龍王の登場が強調されていることがわかる。ところで、興味深いことに、このような光源氏が須磨で遭遇した暴風雨と類似した逸話は円仁にも見られるのである。円仁の『入唐求法巡礼行記』[10]には以下のような記載がある。

⑷承和六年（八三九）五月十九日　夜、比至丑時、雷鳴電耀、洪雨大風不可相当、艫纜悉断、舶即流出

⑹承和六年（八三九）五月二十七日　暁、霹靂降来、擗却桅子駆方之面斜戻折之

⑹承和六年（八三九）六月五日　（前略）北方有雷声、掣雲鳴来、舶上官人驚怕、殊其猶疑冥神不和之相、同共発願、兼解除、祈祠船上霹靂神、又祭船上住吉大神、又為本国八幡等大神、及海龍王、並登州諸山嶋神等、各発誓願、雷鳴漸止

『入唐求法巡礼行記』によれば、円仁が承和五年（八三八）七月に唐に上陸したあと、念願の天台山行きの勅許が降りなかったため、

[10] 『入唐求法巡礼行記』の引用は、『続々群書類従』第十二輯史伝部（東寺観智院本）に拠る。なお、本文の引用にあたっては、異体字などを原則として通行の字体に改め、句読点を施した。以下同。

揚州で密教典籍を書写しながら、失意に約十ヶ月ぐらいの日々が経つ承和六年（八三九）四月に海州東海県から船に乗って、日本に帰ろうしていたところ乳山浦で暴風雨に会ったことが語られている[11]。

円仁の道程と源氏の道程とは、失意の折、浦で暴風雨に遭遇した点が酷似している。『源氏物語』の描写においては、光源氏が失意の底にあった須磨浦で、A（暴風雨の雷鳴）、B（雷、高潮の危機の中で住吉神に祈願）、さらに、C（海中の龍王、諸神に祈願し、屋敷の廊に落雷）という危機に瀕したという設定が成されている。一方、『行記』に記される円仁の失意の旅路は、⑷（暴風雨の雷鳴）、⑹（船の桅に落雷）、⑹（危機の中で住吉神、海龍王などの諸神に祈願）、とあり、光源氏と円仁の遭遇にはかなり似た構造が見られるのである。光源氏は最後、「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね」（②「明石」二一九頁）とあるように、住吉神の導くままに、須磨浦を去って、無事に明石に着いた。一方、『入唐求法巡礼行記』では、円仁一行が「又祭船上住吉大神、又為本国八幡等大神、及海龍王、各発誓願、雷鳴漸止」とあるように、同じく住吉神などの御加護で赤山の麓に無事に上陸できたのである。それぞれ難波から海を渡り、一年にもわたる失意の中に、二人ともに、おおよそ半月の暴風雨落雷の危機から、住吉神・海龍王等の神様の力で無事に脱出することができたのである[12]。

三、「聖なる異界」で出会えた龍王達ー「秘なる宝蔵の洞窟」ー

このようにして浮かび上がった『入唐求法巡礼行記』と『源氏物語』との相似性は、どこまで徹底しているのであろうか。

『行記』承和六年（八三九）七月二十三日条には、「聞遵向北巡礼

---

[11] 円仁の入唐求法に関しては、藤原克己氏「円仁の『入唐求法巡礼行記』について」（『国語と国文学』、一九八七年十一月）、E・O・ライシャワー氏『円仁　唐代中国への旅』（講談社、一九九九年六月）、佐伯有清氏『円仁』（吉川弘文館、平成元年三月）を参照。

[12] これ以降の展開に関して別の観点から論じたものとして、拙稿「『源氏物語』に埋もれた〈清涼山〉を掘り起こす――「須磨・明石」から古代東アジアへ――」（『日本文学』二〇〇九年九月）を参照。

有五台山、去此二千余里計、南遠北近、又聞有天台宗和尚法号志遠久〔文〕鑒座主、亦天台玄素座主之弟子、今在五台山、修法華三昧（中略）、暫休向天台之議、更発入五台之意」[13]とあり、円仁は「住吉神」と「海龍王」の御加護で承和六年六月七日に暴風雨から無事に赤山の麓に上陸できたのだが、そこの赤山法華院に滞在していた時に、また神の御導きであるかのように、赤山法華院より南にある遠くの天台山を取りやめて、翌月の七月二十三日に北にある近くの五台山を巡礼する意思を固めたのである。

円仁が巡礼を決めた五台山とは、今の中国山西省にある仏教聖地であるが、『華厳経』「菩薩住処品」に「東北方有処、名清涼山、従昔已来、諸菩薩衆、於中止住、現有菩薩、名文殊師利、與其眷属、諸菩薩衆、一万人倶、常在其中」[14]とあり、五台山（清涼山）は文殊の住処に当たるということで、文殊信仰として名高い聖地で知られる。宋の『続清涼伝』[15]巻上の語るところによれば、「夫清涼山者、大唐東北、燕趙西南、山名紫府、地号清涼、即菩薩修行之地、是龍神久住之郷（中略）、八池霧罩、九洞雲遮（中略）多蔵五百龍王」とある。五台山即ち清涼山は古くから「龍神」「龍王」が潜むところであり、「龍神久住之郷」として知られている。

ところで、『行記』によると、円仁が承和七年（八四〇）三月から登州を出発し、同年五月に五台山に到着したとある。ここで円仁が出会う風景は不思議なものである。『行記』には、五月二十日、円仁が五台山の中台の頂上に登ったとき、こう記している。

> 到中台、台南面有求雨院、従院上行半里許、到台頂、（中略）鉄塔北辺有四間堂、置文殊師利及仏像、従此北一里半、是台頂中

[13] 本文は『続々群書類従』第十二輯史伝部（東寺観智院本）に依拠したが、久鑒座主を『大日本仏教全書』遊方伝叢書一の本文により、文鑒座主に訂正した。以下『行記』と簡略す。

[14] 『華厳経』「菩薩住処品」の引用は『大正新脩大蔵経』（第十冊、「大方広仏華厳経」巻第四十五）による。二四一頁。

[15] 『続清涼伝』の引用は、『大正新脩大蔵経』（第五十一冊、史伝部）による。一一二九頁。なお、本作を含め、諸資料の引用にあたっては、異体字等を原則として通行の字体に改め、私に句読点を施した。＜＞内は割注・傍注を、（ ）内は稿者による注記を示す。

心、有王花池、四方各四丈許、名為龍池

また、西台に行った際、

従供養院向西上坂五六里、到西台頂、（中略）台頂中心亦有龍池、四方各可五丈許、池之中心有四間龍堂、置文殊像

なお、北台については、以下のように、詳細に記述されている。

到北台、台頂周円六町許、台躰団円、台頂頂南頭有龍堂、堂内有池、其水深黒、満堂澄潭、分其一堂為三、隔中間是龍王宮、臨水池、上置龍王像、池上造橋、過至龍王座前、此乃五台、五百毒龍之王、毎台各有一百毒龍、皆以此龍王為君主、此龍王及民被文殊降伏、帰依不敢行悪

さらに、承和七年（八四〇）七月二日条に円仁が五台山の南台を巡礼する際には、

誠知五台山乃万峰之中心也、五百毒龍潜山、而吐納風雲

と記されている。『行記』の記述によると、円仁が巡礼した五台山は「聖地」というよりも、人間界に存在しない「龍王」の世界であったとみなした方が妥当である。円仁が北台について描く記述の中には、五台山の五台の頂上に潜む「龍王」は、実は文殊師利菩薩によって降伏され、帰依したという話が含まれる。例えば、円仁が東台を巡礼したあと、

従台頂向東、直下半里地、於峻崖上有窟、名那羅延窟、人云、昔者那羅延仏於此窟行道、後向西去、窟内湿潤、而水滴戸、闊六尺、窟内黒暗、宜有龍潜蔵矣

とあり、「龍王」「龍王宮」「龍池」という語で示されるように、文殊師利菩薩に降伏された各々の「龍王」が今にも五台山の東・西・南・北台頂上の「龍池」の「龍王宮」にいることが確かめられるだけでなく、そこは「聖地」というイメージ以外に、「龍池」「龍窟」「龍宮」が顕在する「異界」であることが明らかに示されているのである。ということで、五台山は文殊菩薩の住処としての「聖地」であるだけでなく、「龍王」が棲む「異界」でもあり、いわば「聖なる異界」と見なされているということである。

もし、「五台山」が現世における「聖なる異界」であるならば、そこには、「聖なる異界」に相応しい、並々ならぬ聖性と伝説が備わっていなければならない。『行記』によれば、こうした「聖なる異界」の「五台山」には、確かに「秘なる伝説」があった。しかも、その伝説においては、「洞窟の宝蔵」という記述が語られた興味深い箇所がある。『行記』五月二十三日、五台山の東台を巡礼した後、以下の記述が見られる。

> 更向西谷行一里許入谷、到金剛窟、窟在谷辺、西国仏僧仏陁波利室手来到山門、文殊現者人身不許入山、更教往西国、取仏頂尊勝陀羅尼経、其僧却到西天、取経来到此山、文殊接引、同入此窟、波利纔入窟門自合、于今不開、窟巖堅密、帯黄色、当窟戸有高楼、崛門在楼下、人不得見、於楼東頭有供養院、窟戸楼上有転輪蔵、六角造之、見于窟記、窟内多有西天聖迹、維衛仏時、香山摩利大仙造三千種七宝楽器、其仏滅後、文殊師利将来、取処窟拘留、泰仏時、兜率天王造鐘、盛一百二十石、聞声者或得四果、或得初地等、仏滅文殊師利将此鐘来、置此窟中、迦葉仏時造銀箜篌、有八万四千曲調、八万四千曲調各治一煩悩、仏滅度後、文殊師利将此箜篌来、収入窟中、星宿劫第二仏全身宝塔一千三百級、文殊菩薩将此塔来、収入此窟、振旦国銀紙金書、及百億四天下文字、文殊菩薩収入此窟云々（後略）

この『行記』の語るところによれば、五台山東台の西谷の金剛窟はインドの僧仏陀波利が、『仏頂尊勝陀羅尼経』を持参し、文殊とともにこの洞窟に入った逸話が見られる。この金剛窟伝説の中核を成すのは、円仁がある『窟記』の本文を引用して[16]、そこには「三千種の七宝楽器」「兜率天王の鐘」「銀の箜篌」「銀紙金書」などが秘蔵されていることがわかり、「聖なる楽器」と「秘なる書籍」を秘蔵した洞窟であると知ったという点である。

[16] 円仁が引用した『窟記』について、小野勝年氏『入唐求法巡礼行記の研究』第三巻には、この『窟記』が承和十四年の『入唐新求聖教目録』所載の『五台山金剛窟収五功徳記』一巻に相当するものと論じられている。

このように、東台の「金剛窟」伝説と突き合わせることによって、五台山とは、「聖なる異界」としての「龍池」「龍穴」「龍窟」以外に、「秘なる宝蔵の洞窟」をも意味する地であると位置づけることができるのである。

四、二つの「宝蔵」—「秘曲」と「如意宝珠」をめぐる旅

さて、ここまで確認したように、円仁の五台山巡礼とは、「龍穴」「龍池」「龍窟」といった「異界」に繋がる神秘的な洞窟世界をめぐる旅であるとともに伝説なる「宝蔵」を秘蔵した「洞窟」に触れる旅でもあると考えられるのである。ここからは、円仁が五台山における求法巡礼の中で見た「洞窟」の宝蔵について詳しく考察したい。

まずは、前述した金剛窟についてもう一度見てみる。『行記』の記述によると、そこには、「三千種の七宝楽器」「兜率天王の鐘」「銀の箜篌」「銀紙金書」などが秘蔵されていることがわかる。さらに、唐の『古清涼伝』[17]によれば、五台山の金剛窟については、以下のような興味深い話が見られる。

> 伝聞金剛窟。金剛窟者。三世諸仏供養之身。多蔵於此。按祇洹図云。祇洹内。有天楽一部。七宝所成。箋曰。又按霊跡記云。此楽。是楞伽山羅刹鬼王所造。将献迦葉仏。以為供養。迦葉仏滅後。文殊師利。将往清涼山金剛窟中。釈迦仏出時。却将至祇洹。一十二年。文殊師利。還将入清涼山金剛窟内。又有銀箜篌。有銀天人。坐七宝花上。弾此箜篌。又有迦葉仏時金紙銀書大毘奈耶蔵。銀紙金書修多羅蔵。仏滅後。文殊。並将往清涼山金剛窟中。

この『古清涼伝』の語るところによれば、円仁が五台山において「龍池」「龍穴」「龍窟」といった穴だらけの「聖なる異界」で出会った伝説の金剛窟の中には、実は楞伽山羅刹鬼王が造った「天楽一部」、つまり、非人間の鬼が作った「秘曲」が秘蔵されていることがわか

[17] 『古清涼伝』の引用は、『大正新脩大蔵経』の『古清涼伝』巻上（第五十一冊、史伝部）による。一〇九五頁。

る。さらに、この金剛窟については、宋の『広清涼伝』[18]によると、

北台頂上有天井。下有龍宮白水池相連。金剛窟亦相通徹

とあり、「秘曲」を秘蔵する金剛窟は、多くの伝説の聖地が共通するように、龍の棲家としての「龍池」「龍宮」に繋がっている[19]。多くの竜宮伝説にあるような、竜宮には秘蔵される宝があるという竜宮説話を構成するもっとも根本的な要素が、この五台山伝説に見事に集約されているのである。

円仁が巡礼した五台山は、「竜宮」であり、その上に「秘宝」を秘蔵する「竜宮」でもあるイメージがこうし形作られる。

さて、円仁の『行記』には、「聖なる異界」で「秘曲の洞窟」に出会った後、更なる貴重な経験が登場してくる。円仁が五台山巡礼の後、承和七年（八四〇）七月、長安に向う途中、金閣寺堅固菩薩院に宿泊した翌日に、次のような記事がある。

二日、共義円供主等及寺中数僧開金閣、礼大聖文殊菩薩騎青毛師子聖像、金色顔貌、端厳不可比喩、又見霊仙聖人手皮仏像及金銅塔、又見辟支仏牙仏肉身舎利、

円仁は金閣寺で「仏舎利」という類まれなる希少なる宝物に出会えたのである。同年七月二十三日、石門寺によったときにも、

山門有小寺、名為石門寺、寺中有一僧、長念法華経已多年、近日感得舎利、見傾城人尽来供養、僧俗満寺、不知其数、得舎利之初源者、念経僧於夜房中坐念経、有三道光明来照、満房暉明、而遍照寺、尋光来処、従寺西有巌底出来、毎夜照宇及寺院、其僧数日之後尋光到巌所、掘地深一丈余、得三瓶仏舎利、青瑠璃瓶裏有七粒舎利、白瑠璃瓶中有五粒舎利、金瓶之中有三粒舎利、

---

[18] 『広清涼伝』の引用は、『大正新脩大蔵経』の『広清涼伝』（第五十一冊、史伝部）による。一一〇五頁。

[19] 黒田日出男氏『龍の棲む日本』（岩波新書、二〇〇三年三月）には、日本国内における多くの聖地が挙げられ、その特徴を多くが龍の棲みかとしての聖なる池や湖が相互に繋がっていたのだとしている。さらに氏は、中世の「国土」とは龍の棲む「大地」ないしは龍体の「大地」とみなされていたのであり、なおかつその地下世界は網の目のように穴道が広がっており、この巨大な地下の世界の穴道が神々の通路となって、神は随所に姿を現していたのだと論じている（同書、一五九頁）。こうした「龍の棲む国土」という中世人の思想は、本稿で述べた五台山の「龍池」「龍穴」信仰とどう繋がっているのか興味深い論点である。

擎来安置仏殿中供養、

とあり、石門寺でも霊験あらたかな「仏舎利」に巡り合ったとする内容が記されており、このように『行記』には円仁が「仏舎利」をめぐる霊験あらたかな奇譚が生き生きと語られていたのである。また、円仁が長安に入京したあとの同年九月六日に以下のような記事が見られる。

六日、早朝当院僧懐慶持念為業、将仏舎利五粒来令礼拝、語曰、如要持秘法余能知一城内解大法人

円仁は長安で求法滞在していたとき、浄土院の僧懐慶が仏舎利五粒を持ちより、彼はそれに礼拝させながら、円仁に密教に通達している人物を教えてくれたのである。ここまで見たように、巡礼の前半に五台山を訪れた円仁の旅は、後半では、「仏舎利」と緊密に結びついたものとして描き出されている。

さらに『行記』には、「仏舎利」に関する記事がもう一つある。円仁が唐会昌元年（八四一）に、唐の都長安での「仏牙供養」という記事がそれである。

従三月八日至十五日、薦福寺開仏牙供養、（中略）、荘厳仏牙会、向仏牙楼散銭如雨、求法僧等十日往彼随喜、登仏牙楼上、親見仏牙頂戴礼拝、（中略）、亦二月八日至十五日開仏牙供養、崇聖寺亦開仏牙供養、城中都有四仏牙、崇聖寺仏牙是那吒太子従天上将来、與終南山宣律師

円仁が求法巡礼の後半、唐会昌元年に長安の四つの寺における釈尊の「牙舎利供養会」に邂逅し、同年二月二十五日[20]に崇聖寺に供養される毘沙門天の子、那吒太子将来の「仏牙」を「親見」したとある。「仏牙舎利」と出会えたことが、いかに円仁にとって貴重で重要な体験であったかは、『行記』の記述から窺われるわけだが、こうした一連の記事から知ることができるように、円仁の「異郷における求法巡礼」という旅は、前半の五台山においては、「龍穴」「龍池」

[20] 『入唐求法巡礼行記』会昌元年二月二十五日条「詣崇聖寺、礼釈迦牟尼仏牙会、有人多云、終南山和尚随毘沙門天太子、得此仏牙、那吒天子従天上将来與和尚、今置此寺供養」とある。

「龍窟」といった「聖なる異界」をめぐる旅として、後半の求法巡礼はまさに「仏舎利」に出会った旅であることにあらためて注目する必要があろう。

さて、ここで注意すべきは、円仁は唐の長安において法威の象徴である「仏舎利」を単に見ただけではなく、彼が唐で「仏舎利」を入手したのち、叡山に舎利を招来させ、比叡舎利会を始行した人物であり[21]、のちに叡山における最初の本格的な密教建築と言われる総持院を建立した人物でもあるという点である[22]。

周知のように、彼が唐という「異国」で手に入れた「仏舎利」は後に総持院の塔下に収められた。いうまでもなく、「仏舎利」は釈尊が入滅したあと残った遺骨であり、円仁より以前には空海や義真らといった「遣唐僧」の「異界（異国)」渡海によって日本へ招来したという記録が残っている[23]。特に、院政期以降、白河院・平清盛といった＜王権＞獲得者と目される人々からは、舎利は王法仏法相依の思想と緊密に結びついた＜王権＞の象徴として機能していたことは、すでに田中貴子氏によって指摘されるとおりである[24]。さらに、同氏は院政期の＜王権＞の象徴としての舎利は龍王秘蔵の「如意宝珠」と同一化を遂げ、天皇の即位の際に行われる即位灌頂と密接な関わりを有していた[25]とも、論じている。

さらに、ここで注目してみたいのは、「仏舎利」と「如意宝珠」との「同一化」がどのようにして行われたのかということである。例

---

[21] 円仁が将来した「仏舎利」の詳細と「比叡舎利会」については、詳しくは横田隆志氏「舎利をめぐる法会と説話――『三宝絵』下巻「比叡舎利会」を読む――」（『国語と国文学』平成十二年十二月号）を参照。

[22] 藤井恵介氏「天台の建築」（『月刊文化財』昭和六十一年四月）、同氏『密教建築空間論』（『中央公論美術出版』平成十年）参照。

[23] 空海の舎利伝承については、『大正新脩大蔵経』（第七十八冊）の『幸心鈔』には、「先此宝大師被渡我朝後。当流一顆習之時ゥ一山此法ヲコソ被埋タレ。此物不被埋。仍仍代代東寺長者令相伝勤修之也。（後略)」。また、「大乗院寺社雑記」寛正三年（一四六二）十月四日条に「爰嵯峨ノ天皇御宇ニ、弘仁元年義真和尚号修禅大師、入唐シテ此舎利ヲ伝フ、同三年辰帰朝シテ円澄ニ伝、入唐シテ号舜光大師、円澄円仁ニ伝入唐シテ号慈覚大師、次安恵阿闍梨ニ伝、次円珍少僧都ニ伝号智証大師、次祐真律詩ニ伝フ、其後代代相承（後略)」とある。

[24] 田中貴子氏「仏舎利相伝系譜と女性」『外法と愛法の中世』（平凡社、二〇〇六年三月十日）一六三頁～一六四頁。

[25] 田中貴子氏「宇治の宝蔵」『外法と愛法の中世』（平凡社、二〇〇六年三月十日）一四四頁～一四五頁。

えば、『無量寿経』[26]には、以下のような興味深い伝承がある。

> 借彼摩尼如意宝性示安楽仏土不可思議性也。諸仏入涅槃時以方便力留砕舎利、以福衆生、衆生福盡、此舎利変為如意宝珠。此珠多在大海中、大龍王以為首飾

ここからは仏の舎利が如意宝珠に変わって、海中の龍王の首飾となったことがわかる。また、『釈迦譜』巻第五にも、インドマウリヤ王朝の第三代王のアショーカ王時代に舎利塔を新たに建造する時に、「龍宮」まで取りに行った話が見られる[27]。

『無量寿経』や『釈迦譜』の記述から窺知できるように、「仏舎利」は大乗経典成立の時期より、海の龍宮で龍王の「如意宝珠」として秘蔵されたとする伝承があったと思われる。おそらく、中世においては、＜王権＞の象徴として「仏舎利」と「如意宝珠」とを同一化する論理が形成される以前、すでにそれよりも前の時代から、砕けた「仏舎利」が海中の龍王の「如意宝珠」として秘蔵されるとする伝承が僧侶をはじめとする知識人の間に浸透していると思われるのである[28]。

そこから考えると、入唐巡礼し、唐の都長安の崇聖寺で毘沙門天の子、那吒太子が招来した「仏牙舎利」を実際に見、さらに唐といった異国で「仏舎利」を入手し、その「仏舎利」を叡山まで招来した円仁は、実は希世の珍宝である「龍宮」の「如意宝珠」を手にしていたと言えるのはないだろうか。

---

[26] 『無量寿経』の引用は、『大正新脩大蔵経』（第四十冊）『無量寿経』「優婆提舎願生偈註」の段による。

[27] 『釈迦譜巻第五』の「阿育王造八萬四千塔記」『大正新脩大蔵経』（第五十冊、史伝部一）には「時王欲建舎利塔。将四兵衆至王舎城。取阿闍世王仏塔中舎利。還復修治此塔與先無異。如是取七仏塔中舎利。至羅摩村中。時諸龍王。将王入龍宮中。王従龍索舎利供養。龍即分與之」とある。七八頁。

[28] なお、日本の仏教説話における龍の話に関する論として、陳明姿氏「『今昔物語集』における龍の説話と中国文学」（『台大日本語文研究』第十五号、二〇〇八年六月）がある。

五、「もうひとつの巡礼記」への導き手としての『入唐求法巡礼行記』—変貌する光源氏像

周知のように、『源氏物語』須磨・明石巻では、光源氏が須磨浦を去った後、明石という地で明石君と出会うことができたと書かれる。『源氏物語』明石巻で、琴の一族の明石入道の娘と結ばれたということは、いわゆる「如意宝珠」を獲得することだと、すでに島内景二氏、村井利彦氏によって指摘されている[29]。

「はじめに」で触れたように、明石の物語に潜在する神話的話型を中心にする把握だけでは、光源氏が須磨で暴風雨の遭遇の理由や海龍王と住吉神の御加護の理由をどう解釈するかという問題について十分な解明ができない。しかし、ここまで見てきたように、もし、光源氏の須磨流離における暴風雨の遭遇、海龍王・住吉神の御加護の描写が、異界渡海を辛苦した円仁の入唐求法の旅行をモチーフとして書き出されたと、考えたならばどうであろうか。

二人とも、同じ難波から船に乗り、失意の底にいたところに、暴風雨が襲来し、さらに落雷の危機の中から、海龍王・住吉神の御加護によって安全な地に上陸できたわけである。円仁の場合は、これをきっかけに龍王が棲む「聖なる異界」を巡礼し、のちに「秘曲」の洞窟に邂逅し、そして「如意宝珠（仏舎利）」を手に入れたのであるが、光源氏もまた円仁が歩んだ道程を再び踏まえるかのように、明石に上陸したあと、「秘曲」相承の明石一族に邂逅し、「如意宝珠」と言われる明石姫君を獲得したのである。

光源氏が、帰京することが許され、入京する直前に「住吉にも、たひらかにて、いろいろの願はたし申すべきよし、御使して申させたまふ」（②「明石」二六一頁）と住吉大社に願ほどきのお礼をお使いを向けて報告したことが書かれているが、円仁もまた承和十四年（八四七）九月十九日に帰国ができた時、『行記』に「二十九日午後為住吉大神転五佰巻」と記しているように、円仁が都に入京する前

[29] 島内景二氏『源氏物語の話型学』（ぺりかん社、平成元年）、村井利彦氏「夜光る玉」（『源氏物語とその周辺』、勉誠社、平成三年）。

にも、住吉神で願を解いたことがわかる。そして、希世の珍宝の「仏舎利」といった「如意宝珠」を得た円仁が、承和十五年（八四八）七月に内供奉十禅師、仁寿四年（八五四）四月に天台座主まで昇進したように、「明石の姫君」といった「如意宝珠」を手に入れた光源氏も、帰京後、権大納言、内大臣、太政官の最高位の太政大臣にと、同じようにとんとん拍子で昇進したのである。

順番	事項	『入唐求法巡礼行記』（円仁）	『源氏物語』（光源氏）
旅の前	御陵参拝	奉山階田原柏原神功皇后陵	院の御墓拝みたてまつりたまふ
	賀茂参拝	遣唐使奉幣賀茂大神社	御社の方拝みたまふ
出発	難波から渡海	向摂津国難波海口慰労聘唐使	御舟に乗りたまひぬ
目的地到着	失意した日日	揚州で失意した日日	須磨で失意した日日
危機（一）	半月ぐらいの暴風雨	比至丑時雷鳴電	雷鳴りひらめく落ちかかる心地して
危機（二）	落雷	霹靂降来擗却桅子	廊に落ちかかりぬ
霊験（一）	海龍王に祈願	又祭船上住吉大神及海龍王	海の中の龍王よろづの神に願を立て
霊験（二）	住吉神に祈願	又祭船上住吉大神	住吉の神近き境を鎮め護りたまふ
場所移動	無事上陸	挙帆進行未申之際到赤山東辺	はや舟出してこの浦を去りね
異界訪問	異界訪問譚	龍王が住む五台山へ	畿外の明石へ
秘曲	楽器秘曲譚	金剛窟秘伝する楽器	明石一族の秘曲
如意宝珠	如意宝珠譚	仏舎利	如意宝珠（明石の姫君）
帰京	帰京前の住吉還願	為住吉大神転五百巻	住吉にもたひらかにて願はたし申す
昇進	官位昇進	内供奉十禅師→天台座主	権大納言→内大臣→太政大臣
建物建造	如意宝珠を蔵する建物	総持院の創建	六条院の造営

こうして上の表から見ると、須磨・明石巻の光源氏は、遣唐僧、円仁が歩んだ道――遠行祈願・失意・暴風雨・落雷・住吉神海龍王の御加護・危機解除・龍宮・秘曲邂逅・如意宝珠入手・無事帰国・住吉還願・官位昇進といった旅程を如実に踏まえるように造形されているのである。『源氏物語』の語り手は、光源氏の須磨流離という「異郷への船旅」を、円仁の『入唐求法巡礼行記』を一つの導き手として参照することで、もう一つの虚構の中での「巡礼旅行」としてまざまざと浮き上がらせた。こうすることで、光源氏を単なる「悲劇的」な人物という役割を超えた、「異界」の希世の珍宝を手に入れた「世にもまれな幸福な」主人公として読み替えることが可能となるのである。